

一文人としての姿勢——夏目漱石のモノからコトへ

台湾大学日本語文学科 范淑文

明治 38 年（1905）に『吾輩は猫である』で本格的に文学の創作を始めた夏目漱石は 50 歳（1916）で世を去ってしまい、その創作期間は作家の中で比較的短かったにもかかわらず、沢山の不朽の名作を残し、それらの多くが今日まで愛読されている作家であることはいうまでもない。小説以外には、それほど数が多いとは言えない漢詩が、学生時代のものにしろ、晩年のものにしろ、いずれも高く評価されている。その一方では、洋画や南画（文人画）など絵画を大変嗜んでおり、アマチュア画家として残した水彩画や南画の作品は意外に多かったことは余り知られていない。

漢詩は親友である正岡子規との応酬のものも少なくなかったが、大多数は晩年『明暗』の執筆中に詠んだ作品である。晩年に持病である胃潰瘍に苦しんでいた漱石は久米正雄と芥川龍之介に宛てた書簡に書いてあるように、当時午前中は小説を、午後は漢詩を詠むという日々を過ごしていたようだ。漢詩を詠んだり、漢詩に広げられている世界の構築を通したりして、当時の漱石は苦痛を感じていた小説の創作を続けることが出来たようである。

その漢詩に目を向けると学生時代に詠んだ漢詩と異なり、晩年の漢詩は、絵画とクロスした意趣の題画詩が多い。その題画詩とは本来先に画を描いておき、その画の趣旨に合わせ漢詩を詠みあげるのが文人の間での暗黙の約束であったが、漱石の場合はそれ以外に後から画を描くつもりでありながら、結局画は描けないままの題画詩が大半であった。それらの絵画や漢詩創作などは一作家である漱石にとっては非常に意義深いことであり、漱石の人生において、文人として生きていた漱石の生涯を理解するには見過ごせないことであろう。

よって、漱石の漢詩、ことに晩年の題画詩に焦点を据え、また幾つかの絵画、初期に友人とのやり取りをしていた絵葉書や漱石の絵画嗜好を合わせ、これらの考察を本発表の主旨とする。こうしたジャンルにおける漱石の表現を一種の〈モノ〉と見なすことができれば、友人との交流をはじめ、文人をなぞって文人の世界を構築することやそこからの精神の癒しというコンテンツ〈コト〉が浮き彫りになってくるのである。